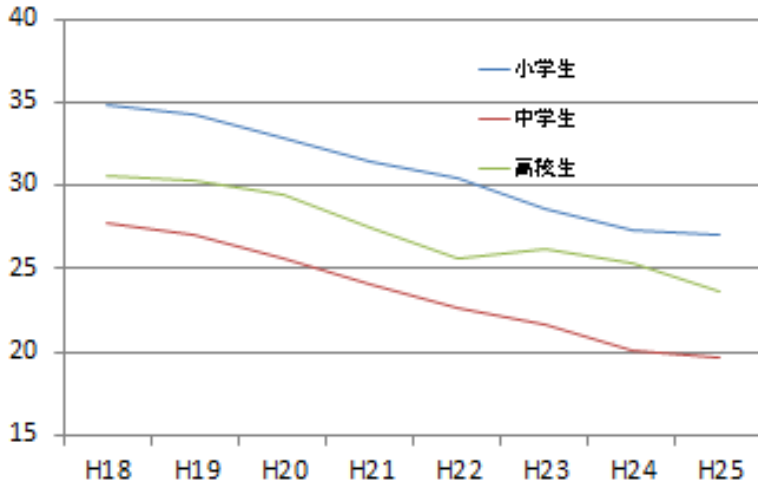


虫歯からの解放（1）

児童生徒の虫歯の状況は、下表の通り、全国的に見ると着実に改善している事が分かります。

最近の全国児童生徒の虫歯(治療未実施)の状況(%)



この表は、まだ治療が行われていない虫歯のある児童生徒の割合の推移である。
【北海道教育委員会の「学校保健調査結果報告書」により作成。】

児童生徒の虫歯は、時代の影響を色濃く反映していると思われます。

終戦直後の1940年代後半は、虫歯の保有率は約40%と低かったのですが、その後の高度経済成長の下で、食糧事情の改善と共に菓子類が一般家庭に広く浸透した事もあり、急速に虫歯保有率が高くなり、1970年代には90%前後という高

率の時代に突入します。

しかし、1980年代以降、虫歯の予防・治療環境が整備されて来た事もあり、児童生徒の虫歯の保有率は減少し続けています。

6月4日付の日本経済新聞には、新潟市の両川小学校における虫歯予防の取り組みが紹介されています。それによると、この学校では毎週火曜日の朝、先生の掛け声の下、子ども達が一斉にフッ化物溶液で1分間うがいをしているとの事です。

こうした取り組みの結果、両川小学校では、今年4月の歯科検診で要治療の虫歯があったのは全児童126人中1人で、治療経験がある子を含めても10人だけだったといいますから、驚きです。

同校養護教諭の籠島千恵子氏は「歯の健康は正しい生活習慣が身に付いた証で、勉強にも好影響を与える。虫歯予防のために出来る事は全部やる」と力強く述べています。

新潟県下の小学校では、94%が給食後の歯磨きを、67%がフッ化物洗口を実施しており、そのかいあって、新潟県内の中学1年1人当たりの永久歯の虫歯本数は昨年度0.55本で、14年連続で全国最少となっています(6月4日付日本経済新聞から)。

全国的に虫歯の保有率が低下して来ているのは、今紹介した両川小学校のような取り組みが全国で行われている成果であり、大変喜ばしい事です。我が北海道の状況を見ると、まだまだ課題は大きいといわざるを得ません。

まず、下表を見ていただきたいと思います。

年度	小学校		中学校		高等学校	
	全道	全国	全道	全国	全道	全国
H18	74.8	67.8	69.5	59.7	82.3	70.1
	42.3	34.9	35.8	27.7	42.6	30.6
H25	63.5	54.1	60.4	44.6	70.8	55.1
	36.0	27.0	28.7	19.7	33.8	23.7

この表は、児童生徒の虫歯の保有状況について平成18年度と平成25年度とを、全道・全国別に対比したものです。

なお、2段書きになっている数値の、上段は治療済みも含めた虫歯保有率、下段は治療の済んでいない虫歯の保有率を示しています。従って、下段の数値が小さいという事は、それだけきめ細かく虫歯の予防や治療が行われている事を示しています。

さて、数字を羅列しただけでは、ピンとこないと思いますので、平成18年度から平成25年度の変化（減少率）に置き換えて見てみたのが、下表の結果です。これを見ると、いずれの校種においても、北海道における虫歯保有率の減少率は全国を下回っている事が分かります。

小学校		中学校		高等学校	
全道	全国	全道	全国	全道	全国
▲15.1	▲20.2	▲13.1	▲25.3	▲14.0	▲21.4
▲14.9	▲22.6	▲19.8	▲28.9	▲20.7	▲23.1

この表は、たかだか8年間の変化に過ぎませんが、それでも上記のように差があり、今後も、こうした傾向が続けば、全国との間で非常に大きな差が生じる事は明らかです。（塾頭：吉田 洋一）